

『りぼん』における「コギャル」の受容と変容 ——藤井みほな「GALS!」を中心に

杉本章 吾

1¹ はじめに

1990年代の日本社会においては、文化メディアの乱立に伴う感性や嗜好の細分化、セクシュアリティの過剰な露出や性的スキャンダルをめぐるモラルパニック、新たな若年女性像としての「コギャル」の定着など、若年女性をめぐる文化的環境はドラスティックに変容していった。近年の文化研究においては、こうした90年代における文化的環境の変容を前提としながら、若年女性における嗜好の多様化やアイデンティティ・ポリティクスの推移を跡付ける研究が散見される²。

ただし、こうした状況の変化はすべての年齢層において均質かつ共時的に進行していったわけではない。近年の若年女性研究の多くは、高校生を中心としたハイティーン層に集中しているが、小学生を中心とした10歳前後の若年女性に目を向ければ、そこにはハイティーン層とは異質な文化風景が浮かび上がってくる。

小学生向け雑誌メディアに注目した場合、最も顕著であるのは、1990年代を通して少女マンガ誌が一貫してヘゲモニックな地位を維持している点である。ハイティーン層においてファッション誌が徐々にポピュラリティを獲得していくとともに嗜好の細分化・多様化が進展していったのとは対照的に、小学生向け娯楽においては一貫して少女マンガ誌が高い人気を保持していた。たとえば、90年代を通して最も高い支持を集めた月刊少女マンガ誌『りぼん』は、矢沢あい「天使なんかじゃない」、吉住渉「ママレード・ボーイ」、小花美穂「こどものおもちゃ」など、少女の日常生活を主軸に据えた作品を数多く輩出するとともに、メディアミックス戦略を敢行するなかで1994年には月刊250万部を記録している。またライバル誌である『なかよし』も、武内直子「美少女戦士セーラームーン」（以下「セーラームーン」と省略）やCLAMP「魔法騎士レイアース」など、戦闘美少女を主人公に配した人気作品を擁し、『りぼ

ん』と同様にメディアミックス路線を採用することで、94年には200万部を突破していた。

さらに、こうした小学生向け少女マンガ誌の継続的な人気を支えたのは、個々のマンガ・テキストやメディアミックス戦略だけではない。周知のとおり、小学生誌には、ハイティーン層向け少女マンガ誌や少年誌と異なり、通例として「8大ふろく」や「10大ふろく」と銘打たれた大量の付録が添えられていた。文房具や組み立て式ボックスに「かわいらしい」キャラクター図像をあしらったこれらの付録は、少女読者の購買意欲や所有欲求を刺激する経済的アイテムとして重要な役割を果たすとともに、「かわいい」という少女的感性を日常生活に浸透させる文化的装置としても重要な役割を果たしていた。また、ハガキやイラストの投稿欄、懸賞応募企画やマンガ家のインタビュー記事、読者プレゼントなど、小学生向け少女マンガ誌は、読者と雑誌の双方向的なコミュニケーションを重視した誌面づくりによって、雑誌を媒介とした親密な読者共同体を編成することに成功していったのである³。

ただし、それは小学生向け少女マンガ誌がハイティーン層における文化的流行と没交渉であったことを意味するものではない。少女読者の関心を第一義に置くメディアの特性からも、出版規模の維持／拡張を使命とする文化産業としての性格からも、こうしたハイティーン層における文化的変動は無視しえるものではなく、小学生向け少女マンガ誌もまた、従来の「少女」像に同時代の新たな文化表象を節合しながら、そこに表象される若年女性像の内実を変転させていったのである。

本論文はそのなかでも、90年代を代表する新たな若年女性文化の潮流であると同時にモラルパニックの主体でもあった「コギャル」に着目し、この新たな若年女性像が「小学生」向け「少女マンガ誌」というメディアの条件のもと、いかなる屈曲を孕みながら表象されていったのか、藤井みほな「GALS！」を中心に考察するものである。

藤井みほなは、1990年に「無邪気なままで」でデビューして以降、「パッションガールズ」「龍王魔法陣」「秘密の花園」など、継続的に『りぼん』本誌に作品を掲載し、90年代を通して連載作家として一定の地位を確立していった、『りぼん』の生抜き作家である。なかでも彼女の最大のヒット作となったのが、1999年から2002年に連載された「GALS！」であった。寿蘭、山咲美由、星野綾という三人のコギャルを主要人物に配し、渋谷を物語舞台としたこの作品は、読者から圧倒的な支持を集め、種村有菜「神風怪盗ジャンヌ」、高

須賀由枝「グッドモーニング・コール」などと並んで、世紀転換期の『りぼん』を代表する看板作品のひとつであった。

少女マンガの研究史を振り返れば、これまで『りぼん』に関する研究の多くは、1960年代から1970年代に集中してきたことが指摘できる。とりわけ、「乙女ちっくマンガ」が興隆した1970年代半ばから後半の『りぼん』に関しては、テキスト論や読者受容論、少女マンガ史論や消費社会論など様々な文脈のなかで旺盛な議論が繰り広げられてきた⁴。しかしながら、乙女ちっくマンガを牽引してきたマンガ家たちが『りぼん』本誌から姿を消し、『りぼん』が小中学生に主要な読者層を再定位していった1980年代以降に関しては、いまだ十分な研究が進んでいるとはいえない⁵。1980年代から90年代にかけて『りぼん』が200万部を超えるまでに出版規模を拡張していったことを考えれば、こうした批評の空白は看過できるものではなく、そのメディア史的意義やマンガ史的位置づけ、そこにおける若年女性像の通史の変遷など考究されるべき点は多い。

また、それとともに、これまでの少女マンガ研究の多くは、少女／女性による自律的メディアとして少女マンガを位置づける傾向が強く、その特性や変遷を少女／女性の精神史と接続する一方、メディアの境域を越えた表象の移動や変容に関しては十分に検討がなされてこなかったことが指摘できる。しかし、高度消費社会の進展とともに、若年女性の趣味の細分化が急速に進展し、若年女性に関する多様な文化的イメージが乱立・競合していった1980年代以降のメディア環境を考慮すれば、少女マンガを分析するに際しても、こうした少女マンガとその「外部」を架橋するメディア横断的な視座は、むしろ積極的に採用されるべきであろう。「少女」が歴史的カテゴリーであると同様、マンガもまた社会の諸関係の結節点である。そうである以上、こうした「外部」の社会的・文化的・メディア的文脈の組み込みは、とりわけ1980年代以降の少女マンガを分析する際には必須のものといえる。

この点に鑑み、本論文は、『りぼん』における若年女性像の変遷を辿るうえで欠くことのできない藤井みほな「GALS!」を取り上げ、「少女」概念の橋頭保として機能してきた『りぼん』において、「コギャル」という異質な若年女性像がいかにして受容され、変容していったのか、同時代の『りぼん』を取り巻くメディア環境のなかにテキストを再配置し、作者／雑誌と読者の複合的な関係のなかで「コギャル」表象が生成されていく過程を詳細に読み解いていく。そのうえで、「GALS!」が『りぼん』というメディアに準拠しながら、

その中核をなす「主人公の異性愛ロマンス」を退けていく過程を明らかにすることが本論文の目的である。

2 コギャル文化の『りぼん』への導入

そもそも、女子高生にまつわる性的スキャンダルが社会的注目を集めていったのは、1993年のブルセラ報道に端を発している。女子高生が自らの着脱したブルマや制服を成人男性に売却するというこの新奇な風俗産業は、メディアにとって格好の話題の種となり、その後もデートクラブや援助交際、覚せい剤やAV出演など、女子高生を主体とする性犯罪や違法行為が露呈するたびに、メディアはこれらの事件を率先して取り上げ、彼女らの倫理観の欠如や内面の不透明性をさかんに喧伝していった。さらに90年代中ごろから、性的なニュアンスを孕んだ「ギャル」から派生した「コギャル」という名称が一般化すると、メディアはしばしば「女子高生＝コギャル＝援助交際」という短絡的な等式のもとに、その過剰なセクシュアリティや粗暴な振る舞いを問題化していったのである。

またそれとともに、コギャルに関するメディア言説が増加した要因として見過ごすことができないのは、ルーズソックスやたまごっち、プリクラやポケベルなど、コギャルの愛用する消費アイテムが広範な消費者層に波及し、つぎつぎと社会現象化していった点にある。「コギャル市場は景気回復の突破口たりうるか!」⁶ 「女子高生カルチャー」に制圧されたニッポンに未来はあるか?」⁷ といった当時の雑誌記事が如実に示すように、この時代、コギャルは都市文化や消費文化のトレンドセッターとみなされ、その独自のコミュニケーション技法やファッションは——懐疑的なまなざしを孕みながらも——ときに長期低迷化する日本経済回復の手がかりとして、またときに混迷する社会状況を反映する鏡像として、幅広い社会層から注目を集めていったのである。

こうした社会的動向と連動するように、1995年には『東京ストリートニュース』や『egg』、1996年には『Cawaii!』など、コギャルを主要な読者ターゲットとするファッション誌や情報誌も続々と創刊され、その美学的感性や文化的嗜好は同世代の若年女性層に幅広く波及していった。さらに、おかしき真理『シャッターラブ』、かわかみじゅんこ『少女ケニア』など、90年代半ばから後半には、ハイティーン層向けの少女マンガ誌や20代女性を主要な読者層とするヤングレディーズ誌においても、コギャルを彷彿とさせる作中人物が増

加し、若年女性を取り巻く広範なメディアにおいて、コギャルは多様な言説や表象を惹起していった。

ただし、「性的に放埒な若年女性」というメディア・イメージが根強く支配する「コギャル」は、小学生向けマンガ誌である『りぼん』に登場する機会は少なく、たとえ登場したとしても、周縁的な立場に置かれるか、否定的な役割を付与されるものが大半であった⁸。

たとえば、1995年から99年に『りぼん』で連載された椎名あゆみ「ベイビ★LOVE」には、ブルセラ騒動を彷彿とさせるエピソードが描かれるなかで、コギャルが忌避の対象として言及されている。ある日、親友の瀬戸小春と街を散歩していた主人公の有須川せあらは、見知らぬ中年男性からモデルとして高額のおファーを受ける。恋人である瀬戸柊平にバイクをプレゼントしたい中学生のせあらは、小春からの忠告にも耳を貸さず、「世の中そんな悪い人ばかりじゃないって」⁹と、無邪気にこのおファー引き受ける。しかし、撮影現場で下着に着替えることを強要された彼女は、それがファッション誌ではなく、アダルト・メディアのモデルであることに気づき、下着に着替えることを拒否する。抗うせあらと小春は男性たちに取り押さえられるが、そこに偶然彼女たちの悲鳴を聴いた柊平の友人が闖入し、ふたりを解放する。と同時に、この柊平の友人である鳴海由希は、せあらに対して以下のように説教する。

こーんな怪しげな おっさんについてくれば どーいう目にあうかぐらい想像つくだろ？ だいたいてめえら じぶんにとれだけの価値があると思ってんの？ 脳ミソからっぽのくせして ちょっとかわいいと思って いい気になってんじゃねーよ わかったら とっとと帰れ！ ばかコギャルども！¹⁰

初対面となるこの場面において、トラブルの現場を目撃した由希は、「脳ミソからっぽ」で、「かわいいと思って」「いい気になって」いる「ばかコギャル」など、メディアによって醸成されたコギャル・イメージを反復するように、否定的な言辭を連ねてせあらの軽薄な振る舞いを痛罵する。思いがけず、自らが嫌悪するコギャルと同一視されたせあらは、「くやしい〜 世の中のばかコギャルと一緒にされた〜」¹¹と憤りを見せるが、その後も由紀は、せあらが放埒な振る舞いを繰り返しているのではないかと勘繰り、柊平のためにふたりの仲を引き裂こうとする。しかし、せあらと接するうちに、次第に彼女が「純情一途で無邪気」¹²な少女であることに気付いた由紀は、徐々にせあらに対する恋愛感情を

募らせ、ついにはせあらをめぐる柗平との三角関係へと発展していく。

以上の要約からも伺い知れるように、この一連のエピソードでは、「悪印象→誤解の解消→恋愛感情の芽生え」という少女マンガに顕著な筋立てを物語に導入する契機として、「知性を欠いた享乐的な若年女性」という典型的な「コギャル」像が利用されている。さらに、せあらを「コギャル」と誤解していた由紀が、彼女の「少女」的心性を知ることによって恋に落ちるというプロットが示唆する通り、「ベイビィ★LOVE」において「コギャル」は明確に「少女」の劣位に置かれており、「純真」や「無垢」といった「少女」的美徳を顕揚するための否定的な媒介者としての役割しか与えられていない。



図1 藤井みほな『GALS!』1巻、集英社、1999年、p.149

それに対して「GALS!」に特徴的であるのは、コギャルが主人公に据えられるとともに、その軽薄で享乐的なイメージや嗜好が前景化されている点である。物語設定を振り返れば、「GALS!」は渋谷のストリートを舞台とし、「カリスマ・コギャル」である寿蘭を主人公に据えた、コメディ的色彩の濃い少女マンガである。蘭は警察官の娘として設定されており、父親から将来警察官となることを宿命づけられた少女である。しかし、「あたしの人生 親の所有物じゃねーもん」(2巻、p.29)と宣言する蘭にとって父親からの期待は将来の道しるべとなるものではなく、彼女は平然とその期待を裏切ろうとする。さらに、学校においても勉強や校則を平然と無視し、渋谷での消費や遊蕩に没入する蘭は、いわば将来への夢や未来への企図を持たず、刹那的

な欲望の充足を第一義に置く、典型的なコギャルとして造形されている。

たとえば、図1は中学生時代の蘭を描いた番外編からの一コマである。ここでは、ルーズソックスやミニスカート、白いカーディガンなど典型的な「コギャル」的装いに身を包む蘭が画面の中央に据えられ、それを取り囲むように彼女のモノローグが四方に配置されている。モノローグには以下の言葉が認められる。

もーすぐ夏休みだし 気合い入れよーと 髪にブリーチ&赤メッシュ入れたら やっぱ先公にどつかれちった 周りの大人はマジメになれってうるせーけど 勝手に言ってるってカンジー 勉強キラーイ 努力キラーイ 渋谷で遊ぶの超タノシー! はっきし言って 今のあたしに怖いモンなんてなんにもナーイ!!

ここでは、「超タノシー」「カンジー」といったコギャルを彷彿とさせる若者言葉が多用されながら、「ベイビィ★LOVE」と同様に、典型的なコギャル・イメージが踏襲されている。ただし、「ベイビィ★LOVE」とは対照的に、ここではそうしたコギャルに対する蔑視的なコノテーションは含まれていない。むしろ、装飾的な花が一面に散りばめられていることから明らかなように、この場面において、コギャルである蘭は少女マンガ的な修辞法によって物語の正統なヒロインとして演出されている。いうなれば、先述の「ベイビィ★LOVE」において「コギャル」が「少女」のヒロイン性を浮き彫りにする対比項として劣位に定置されていたのに対して、「GALS!」ではその位階秩序は転倒され、むしろ「コギャル」の享楽性こそがヒロインの基本的な属性として顕揚されているのである。この点を強化するように、「勉強なんか将来何の役にも立たねーもん! やっぱ遊べるときに遊んどかなきゃさ——っ」(2巻 p.12)、「それがコギャルの生きる道!! 今が楽しけりゃそれでいーんだよ!」(2巻 p.45)など、蘭は物語の随所で自身の利根的な行動原理や信条を披歴し、その享楽的なありようを周囲の人間に誇示している¹³。

こうしたコギャル表象の肯定的な転回を考えるうえで、当時の『りぼん』の置かれていた出版状況は、ひとつの補助線となるであろう。先述のとおり、『りぼん』は、90年代半ばに少女マンガ誌における歴代最高部数を記録し、(少なくとも)商業的な意味においては最盛期を迎えていた。しかし、94年に「姫ちゃんのリボン」、95年に「ママレード・ボーイ」、97年には「ご近所物語」、その翌年の98年には「こどものおもちゃ」など、人気連載作品が終了していくなかで、徐々に出版規模は縮小し、「GALS!」の連載が開始される前年(1998年)には、182万部にまで落ち込んでいた。こうして徐々に出版部数が下降線を描いていくなかで、新しいヒット作の備給や新人作家の発掘は、当時の『りぼん』において喫緊の課題のひとつであったといえる¹⁴。

こうしたメディア史的な文脈を考慮すれば、従来の少女文化に包摂しえないコギャルは、少女誌である『りぼん』のマーケティング戦略においても、も

はや無視することのできない訴求力を持っていたといえる。先述の通り、90年代後半にはコギャルに関して多様なメディア言説が生産されていくとともに、渋谷を象徴的な中心としながら、そのファッションやトレンドが全国的に波及していった。こうして女子高生の代名詞としてコギャルの社会的プレゼンスが増していくなか、世代的にも空間的にもコギャル文化と隔絶した小学生層において、コギャルへの関心が増大していったことは推測に難くない。

そして、この点において「GALS!」はまさしく、少女読者に潜在するコギャルへの関心を惹起することを企図し、コギャル文化の啓蒙をひとつの主題とするマンガであった。それゆえ、「GALS!」の特徴のひとつに挙げられるのは、渋谷の都市空間やコギャル雑誌をひとつの準拠点に設けつつ、コギャルにまつわる同時代の文化的意匠を積極的に導入している点である。藤井みほなは「GALS!」を連載するにあたって定期的に渋谷を訪れ、「コギャル」に関する情報を精力的に収集していることを幾度も明かしているが、こうした作者の言葉が示すとおり、「GALS!」にはキャラクターの衣服やヘアスタイル、言葉遣いやプレイスポットなど、様々な面において同時代のコギャル的な文化意匠を色濃く見出すことができる。たとえば図2は「GALS!」の冒頭場面、図3は同時期にコギャル雑誌『Cawaii!』に掲載された写真であるが、図2の左方に配された蘭の全身像と図3を見比べれば、両者は細部の差異こそあれ、ファー付きのコートの下にタートルシャツとミニスカートを合わせ、厚底のブーツを履くというそのコーディネートにおいてほぼ一致している。



図2 藤井みほな
「GALS!」1巻、
p.7



図3 『Cawaii!』
主婦の友社、
1999年2月、p.16

また、こうした読者への啓蒙的姿勢は、画面構成にも影響を与えており、「GALS!」ではしばしば、少女マンガにおけるスタイル画¹⁵の伝統を引き継ぐように、前後の文脈からゆるやかに遊離した静止画として、コギャルたちの全身像が提示されている。そこにおいて企図されているのは、物語の線状的な秩序に従って滑らかに視線を誘導することよりも、むしろ、視線を停止させ、キャラクターの静止画を鑑賞させることであり、端的に言えば、少女読者にコギャル的なファッションやコーディネートを教示することである。たとえば、こうした画面構成は、上記の図2の場面にも顕著であり、実のところ、ここで



図4 藤井みほな『GALS!』6巻, 集英社, 2001年, p.7

は蘭がナンパをしてきた男性を殴打・罵倒するという行為のコードと同時に、蘭の全身像そのものに読者の注意が集中するように画面が構成されている。こうしたコギャル文化圏に由来する様々な文化意匠の前景化は、結果、『りぼん』読者から大きな反響を呼び、読者がコギャル文化に関心を寄せる契機としても作用していった。藤井みほなは、単行本のコラム欄などで、コギャルに関する読者からの質問が多数寄せられていることを幾度も明かしているが、こうした読者からの要望は、本編のマンガ・テキストはもとより、単行本のミニコラム欄にも影響し、結果、藤井は「GALS!取材誌」と題する渋谷訪問記に加え、十数回にわたって「コギャル」の流行服や装飾品に関するファッション講座を実施していった¹⁶(図4)。さらに、単行本のみならず、『りぼん』においても、作中人物に仮装した写真を募集した「ナリキリGALS!コンテスト」(1999年8月号)、ポーズングのイラストを募った「GALS!キメポーズイラストコンテスト」(2000年11月号)、さらにマンガ家と読者の直接的な交流の場である「りぼんお楽しみ祭り」など、作者／雑誌と読者の双方向的なコミュニケーションの場が組織され、読者がコギャルについて「読み—学び—描き—真似る」という循環的な学習の回路が整備されていったのである(図5)¹⁷。

そのなかで興味深いのは、上記のファッション・コラムに典型的であるように、藤井が、小中学生女子を明確に念頭に置いて、彼女らが「コギャルらしさ」を装うための実践的な助言を心がけている点である。たとえば、「ツメが



図5 「ナリキリGALS! コンテスト」の募集ページ（『りぼん』集英社，1999年6月，p.2）

デリケートなお子様には、接着剤はあんまりオススメできぬ」（3巻 p.89）、「今はエクステが主流？ になってるケド、あれってお金も時間もかかるし、やっぱり小・中学生にはウィッグがオススメ」（4巻 p.99）、「小学生でイチバン安くてゲットしやすいのがパーカー類だと思う」（6巻 p.43）など、コラムのなかで藤井は幾度となく小中学生女子の身体的特徴や社会的・経済的制約を強調しており、そうした制約の枠内で「コギャルらしさ」を追求することを推奨しているのである。

そして、それがゆえに、このコラムでは「とにかく“色っぽさ”とかはムシ!!「お子様ギャル」でイバるべし!!」という図4での作者の言葉が象徴するように、セクシュアリティを喚起する過激な要素は捨象されている。コギャル的な意匠が顕揚されるのは、あくまで「カワイイ」や「オシャレ」といった『りぼん』が読者に推奨する美学的文脈においてであり、過度なセクシュアリティに関しては、抑圧的な姿勢が貫かれているのである。それは、本編のマンガ・テキストにおいても同様であり、コギャルの孕む過剰なまでのセクシュアリティはその表象空間から徹底して排除されている。それでは、「GALS!」はコギャルからいかにしてセクシュアリティを分離していったのか。次節ではこの点について検討する。

3 過度なセクシュアリティの排除

藤井は「「GALS!」制作誌」と題するコラムにおいて、連載を開始するにあたって「どうしてコギャルの話を書こうと思ったの」（1巻 p.41）という読者からの質問が多数寄せられたことを明かすとともに、その理由をコギャルに対するメディア言説への違和感に求め、以下のように述べている。

フジイはそれまでマスコミによる「コギャル」像を、へーそーなんだ、と思

いこんでたフシがあるけど、ルーズはいて髪にメッシュ入れてる女のコが全員マスコミの言う「悪さばかりする」コギャルとは限らないだよなァ。と、ふと反省なんかしちゃったワケさ。そうさ。コギャルもさまざま、中にはけっこーおもしろい熱血系もいるかもしれないじゃん!!と勝手に思いこんで、その「コギャルもさまざま」なイミで『GALS!』とゆータイトルにしたのでありました。(1巻 p.41)

先述のようにコギャル報道が加熱した1990年代半ばから後半にかけては、援助交際のほかにも薬物、万引き、恐喝など、コギャルが関与したと目される犯罪や違法行為が度々取りざたされ、ときに犯罪的な若年女性集団としてコギャルは報じられていった。ここで藤井はそうしたコギャルを有徴化するメディア報道を全面的に批判してはいないものの、「ルーズはいて髪にメッシュ入れてる女のコ」がすべて「悪さばかりする」コギャルではないと、コギャルを一元的にとらえるメディアの短絡的な姿勢に疑義を示している。

この作者の自註が示唆するように、「GALS!」において藤井は享樂的な「コギャル」像を踏襲する一方、「正義感の強いコギャル」としても主人公の蘭を造形している。とりわけ連載の当初には、「コギャル」の否定的イメージを払しょくすることに物語の主眼が置かれており、援助交際や「テレ狩り」¹⁸に関与するコギャルに対して、蘭が独自のコギャル哲学を披歴しながら説論する場面が物語の見せ場となっている。

それ以降も、「GALS!」ではストーカーや問題教師の撃退など、勧善懲悪的な物語形式を繰り返して利用しつつ、義侠心に厚く、様々な犯罪や問題を主体的に解決するヒーローとして蘭を演出している。いわば、この物語において蘭は、社会の規範的価値から逸脱する享樂性を保持する一方、仁義にも通じる独自の行動の美学を備えた倫理的主体としても造形されているのである。両親や教師から強要される社会的役割に対して徹底して反抗の身振りを示すとともに、売春や美人局、ストーカーや風俗斡旋など、若年女性を取り巻く社会的犯罪には——ときに直截的な暴力をも辞さずに——敢然と立ち向かうコギャル。

こうした「GALS!」におけるコギャル像は、受動性・内向性・センチメンタリズムなどを要件とする伝統的な「少女」像と一線を画すとともに、都市文化と親近的なその服装や振る舞いとあいまって、『りぼん』読者から幅広い人気を獲得していった。たとえば、(のちに詳述する)『りぼん』での読者アンケートを見ると、蘭には「いつも明るくて元気だから!・友達思いでやさしーから・

正義感が強くて、どんなことにも負けないから・超オシャレでカワイ→!!・とにかくカッコイイ。憧れだから!!」¹⁹などの読者コメントが確認できる。ここでのコメントが示唆するとおり、いわば少女読者にとって蘭は、コギャル文化と読者をつなぐ媒介者としての役割を果たすととともに、彼女らにとって実践の困難なアクションを代行し、代理体験を可能にするエージェントとしても機能していったのである。

ただし、それは、「GALS!」のなかのコギャルが、従来の「少女」像と断絶していたことをただちに意味するものではない。この点で興味深いのは、蘭が「性的に放埒」なコギャルとみなされることに対して繰り返し否定の身振りを示していることである。先述の通り、「GALS!」において蘭を筆頭とした主要な女性キャラクターは、同時期のコギャル文化圏と共振するセクシュアルな服装に身を包んでいる。ルーズソックスやミニスカートに代表されるコギャル流のファッションは、若年女性のセクシュアリティを過剰に露呈する点で、それまで少女文化のなかで醸成された、「かわいい」ファッションと一線を画すものであった。さらに、こうした過度にセクシュアルな衣服は、男性からの性的なまなごしを誘発し、ブルセラや援助交際などの性的スキャンダルとともに「性的に放埒なコギャル」という社会的イメージを決定づける要因ともなっていた。

ところが、こうしたセクシュアルな服装に身を包みながら、物語のなかで蘭はそれが含意する性的なコノテーションを気に掛けることがない。作中において蘭が男性を誘惑する方途として自身のセクシュアリティを自覚的に利用することはなく、彼女が男性との関係において性的事象に関心を寄せることもほとんどない。そのうえ、蘭はコギャルとしての立ち居振る舞いから「性的に放埒」とみなされることに対して幾度も嫌悪の念を表明している。たとえば、テクストには、蘭が都市の盛り場で援助交際や性交渉を持ちかけられる場面がときおり挿入されているが、そのたびに蘭は、「コギャルがみんなウリやっているとと思ったら大間違い」（1巻 p.28）、「メシおごってもらったくらいで体売るよーな安いコギャルと違う」（1巻 p.119）など、男性から差し向けられる性的なまなごしに対して露骨に嫌悪感を示し、「性的に放埒なコギャル」と自身との差異を繰り返し強調している。

さらに、ここでの「安いコギャルと違う」という蘭の言葉が如実に示す通り、「GALS!」において性愛に対する態度は「コギャル」を階層化する基準ともなっており、「性的に放埒」であることはむしろコギャルとして劣等な根拠と

もなっている。すなわち、「GALS!」において「性的に純潔」であることは、コギャルとして例外的な事態ではなく、むしろその正統性を支える根拠として読み替えられているのである。言い方を変えれば、テキストに通底するのは、コギャルであるからこそ貞節であらねばならないという、純潔規範を基底に据えた「コギャル」観にほかならず、それを印象付けるように、物語の冒頭において蘭は自身が「処女」であることを誇らしげに明かしている（図6）。

性的なコノテーションを孕みながら、セクシュアリティを抑圧されたコギャル。こうした「GALS!」を特徴づける表象の力学は、キャラクターの図像表現にも顕著に見て取ることができる。

マンガ評論家のササキバラ・ゴウは『〈美少女〉の現代史』でマンガ・アニメにおける美少女表象の系譜をたどりながら、80年代後半に少年・青年マンガが、少女マンガに由来する記号的なかわいい「顔」とセクシュアリティを強調した写実的な「身体」を結合した美少女表象を新たに生み出していったことを説得力豊かに跡付けている²⁰。ササキバラはそこに美少女キャラクターの「内面」と「身体」をめぐる男性読者の欲望を読み取るとともに、90年代以降、こうした男性からの欲望をときに自覚しながら、女性マンガ家によって美少女表現が転用されていったというマンガ・アニメ史観を披歴している。ササキバラは、その嚆矢として「セーラームーン」を位置づけ、この作品が多く男性読者から支持を集めることで、「女性が男性消費者を意識した美少女作品を戦略的に描く」²¹機会が増加していったと述べ、その代表的な例としてCLAMPを挙げている。

藤井みほなは、その初期から萩原一至『BASTARD!!』を筆頭に少年マンガからの影響を語っているが²²、とりわけ「パッションガールズ」や「龍王魔法陣」を執筆する90年代中ごろには、こうした少年・青年マンガから派生した美少女像の影響を顕著に見てとることができる。なかでも、「セーラームーン」以降の（少女向け）戦闘美少女作品の流れを汲む「龍王魔法陣」では、美少女のセクシュアリティは如実に前景化され、エロティックな肢体をさらしながら献身的に戦闘に身を呈す主人公の姿が視覚的スペクタクルとして提示されてい



図6 藤井みほな
『GALS!』1巻, p.28

る(図7)。それはまさしく少年マンガにおける美少女像を反復しながら、それを少女読者の憧憬の対象として奪用するものであったといえる。また、それとともに、この作品が「セーラームーン」が爆発的な人気を誇っていた1996年から97年に連載されていたことを鑑みれば、藤井が少女読者のみならず、男性読者をも視野に入れながら、少年・青年マンガの美少女像を転用しようとしていったことは想像に難くない。



図8 藤井みほな
『GALS!』3巻,
集英社, 2000年,
p.130

いわば、「GALS!」のコギャルたちは、セクシュアリティを喚起するコギャル的な衣服に身を包み、大胆に身体を露出する一方で、その身体が孕むセクシュアリティはあいまい化されているのである。言い方を変えれば、そのセク



図7 藤井みほな
『龍王魔法陣』3巻,
集英社, 1997年, p.6

しかし、1998年に連載された「秘密の花園」以降、こうした肉感的な身体描写は徐々に減退していき、「GALS!」では明らかに「かわいらしさ」が作画において優先され、男性からの性的なまなざしを排除するかのようになり、肉体的な欠けたフラットな身体表象が前景化されている。一例として、先の図7と図8を比較してみると、両者はまず少女マンガのなかで醸成されていった、「かわいらしさ」を喚起する記号を組み合わせて「顔」を表現している点において共通している。ただし、「GALS!」では顔に占める目の比重が増し、より幼児化した印象が先行している。

こうしたキャラクターの幼児化は身体表現にも顕著であり、図8では全体的なバランスを欠くほど顔が肥大するとともに、肩幅は狭められ、極端なまでに細長い手足は「女性的」な丸みを帯びることも、立体的な厚みを感じさせることもない。胴体部に目を移しても、そこには胸部のふくらみに代表される、第二次性徴を経た身体的な成熟を示唆する要素は希薄である。

シュアルな衣服とは対照的に、彼女らは性的に未熟な「少女」として造形されているのである。

以上のように、「GALS!」においてコギャルの孕む過剰なまでのセクシュアリティは、その振る舞いにおいても身体造形においても、徹底して脱色されている。それはいわば社会問題化されたコギャルを「無害化」し、少女読者の憧憬の対象として措定するための必然的な方途であったといえる。ただし、こうした「過度なセクシュアリティを排除したコギャル」という「GALS!」の表象戦略は、『りぼん』の要請する倫理的規範に応えるという消極的な意義にとどまるものではない。むしろ、こうしたコギャル像に読者からの人気が集まることで、「GALS!」では「主人公の異性愛ロマンス」という『りぼん』の中心的主題が後景に退けられていくこととなる。次節ではこの点について検討を加える。

4 後景化される「主人公の異性愛ロマンス」

周知のとおり、乙女ちっくマンガが隆盛を迎えた1970年代半ば以降、『りぼん』は等身大の少女の内面に焦点を当て、少女趣味に彩られた異性愛ロマンスを主軸に据えていく。陸奥A子、田淵由美子、太刀掛秀子など、乙女ちっくマンガの代表的な作家はもとより、彼女らが『りぼん』本誌を退いた80年代以降も、その基本路線は変わることがなかった。たとえばマンガ研究者の倉持佳代子は、こうした『りぼん』の方向性を「ピュアな少女の恋、悩み、成長を描く王道の乙女路線」²³と評し、80年以降、『りぼん』が多様なヒロイン像を生成しながらも、そこには一貫して「ピュアな恋心」²⁴が基底をなしていたことを指摘している。こうした乙女ちっくマンガ以降の方向性は1990年にデビューした藤井みほなの作風にも影響しており、その作劇の中心にはたえず恋愛に関する少女の懊悩や憧憬が据えられていた。

それは「GALS!」においても例外ではなく、物語の冒頭部では『りぼん』の基本路線を遵守するように、少女マンガの常套である「ボーイ・ミーツ・ガール」的な物語意匠が踏襲されている。冒頭に目を向ければ、ある日、蘭は、高校生のあいだで人気の明匠第一高校のカバンを持っていることが「コギャルのステイタス」であることを耳にする。カバンをどうしても手の中に入れていた彼女は、渋谷の市街地で明匠第一高校の学生を見かけるやいなや、そのカバンを貰い受けようとする。そこで持ち主に駆け寄せた蘭は、それがコギャル雑誌に

登場する「スーパー高校生」²⁵の乙幡麗であることに気づく。



図9 藤井みほな『GALS!』1巻、pp.22-23

図9は蘭が乙幡に気づく当該場面である。ここでは、きらびやかな幾何学模様を背景としながら、蘭が乙幡のカバンに手をかけた姿が描かれるとともに、その瞬間のふたりの表情がクローズアップで同一のコマの内部に収められている。さらに、左方下部には「あっ」という蘭のモノログが附されており、彼女が乙幡に気づいた瞬間であることが示されている。少女マンガの約束事に従えば、こうした偶発的な出会いを彩る装飾的な画面構成は、両者の特権的な関係性を示唆するものであり、両者の「出会い」が「恋愛の成就」へと発展するであろうことを読者に予期させる、「ボーイ・ミーツ・ガール」の「予告」としての役割を果たしている。

さらに、『東京ストリートニュース』や『egg』など、コギャルの愛読誌において実際に「スーパー高校生」と称される高校生たちが読者モデルとして登場し、カリスマ的な人気を誇っていたことを鑑みれば、コギャルを主人公に据え

たこの物語において、乙幡が主人公の恋人として正統な資格を付与されたキャラクターであることは疑いない。

しかし、興味深いことに、こうした「ボーイ・ミーツ・ガール」形式の出会いを演出しながら、「GALS!」のなかで二人の恋愛は最後まで成就することがない。テキストは物語の随所で両者の特別な関係性を示唆し、乙幡が蘭に好意を持っていることを幾度も暗示しながらも、最終的に両者を恋人として結びつけることはない。そればかりか、物語の中途において蘭は——「ボーイ・ミーツ・ガール」を仕切り直すように——唐突に登場した黒井達樹という別のキャラクターと交際を開始することとなる²⁶。



図10 藤井みほな『GALS!』3巻、
p.131

ある日、渋谷で中学生たちにパラパラを教示していた蘭のもとに、達樹は突如現れる(図10)。二人はダンスを通じて意気投合するが、達樹が地元の町田で「遊び飽き」、「シゲキを求めて渋谷に来た」と述べると、蘭はこの郊外からの新参加者に対して「どーせ 女ダメしたか 悪さして捕まるかしたんだろ」と、軽い不審感を抱く(3巻 pp.134 - 135)。しかし、達樹がそれを即座に否定し、蘭との出会いに「運命」を感じたと告白すると、蘭は躊躇うことなく「おもしろーからつき合ってやる」(3巻 p.137)と、達樹からの告白を受け入れる。

この一連のエピソードは、紙幅に換算すれば8ページ程でしかなく、両者の出会いから恋愛の成就に至るまでの中間的な出来事はほとんど記述されていない。また、そのなかで蘭が達樹からの唐突な告白に逡巡することも、モノログを通じてその内面を読者に明かすことも一切ない。そのため、両者の恋愛の成就是、「軽薄で刹那的なコギャル」という蘭のイメージに似つかわしいものの、それまで物語を追いかけてきた読者にとって、きわめて唐突かつ恣意的な印象を与えるものとなっている。

また、その来歴を振り返れば、町田という東京郊外に出自を持つ達樹は、「スーパー高校生」として造形された乙幡とは対照的に、そもそも渋谷では無名の高校生として設定されている。それゆえ、交際の端緒において蘭が「渋谷

谷の寿蘭」を彼女にすってスゲーことなんだぜ？」（3巻 p.147）と放言し、達樹が自身を「シンデレラボーイ」（3巻 p.155）と形容するように、渋谷の若者集団のなかで両者は明確に序列化されている。こうした階層性は交際後の関係にも如実に反映されており、交際を通じて行動の主導権を握るのはたえず蘭の側であり、達樹はそれに追従する従属的な立場に置かれている。すなわち、物語のなかで蘭がつねに自らの内発的な関心や欲望に従って行動を起こす行為主体として定位されているのに対して、達樹はその行動をサポートする「援助者」としての役割しか与えられていないのである。

さらに、こうした関係の非対称性を強化するように、達樹との交際が始まっても、蘭の欲望や関心は主にコギャル同士の友情や池袋のコギャル・グループとの抗争、渋谷での消費や遊蕩といった非一性的な享楽に向けられており、彼女が達樹との恋愛に耽溺することも、その関係を特権化することもない。それは『りぼん』掲載時のあらすじ欄を見ても明らかであり、「あたしとタツキチ（達樹の愛称——引用者註）って「ラブラブ」って感じか、おい？」²⁷、「そういえば、去年のクリスマスイブに、タツキチとカレカノ宣言したんだよね。でも、すっかり忘れてたよ」²⁸など、あらすじ欄にはしばしば達樹との関係を軽視する言葉が——蘭の一人称を借りて——書き添えられている。この点を鑑みれば、「GALS!」のなかで達樹との恋愛は、「主人公の異性愛ロマンス」という体裁を最低限整えるためのアリバイ以上の意味を与えられてはいないといえる。

この点において、本作の担当編集者であった富重実也による以下の証言は非常に示唆的である。富重は、矢沢あい「ご近所物語」や小花美穂「こどものおもちゃ」など、90年代を通して『りぼん』の代表作に数多く関与するとともに、「トミーのくねくね横丁」と題する人気読者ページを担当していた名物編集者である。富重は、『りぼん』編集部を回顧したインタビュー記事において、担当作の舞台裏や当時の付録や読者ページに関する貴重な証言を残しているが、そのなかで担当作のひとつであった「GALS!」について次のように述懐している。

藤井先生の「GALS!」も連載しながら展開が大きく変わった作品なんですよ。主人公は当初の予定と違う男キャラとくっついてしまった（笑）それにあまり恋愛をメインで描かない方向になっていったんですよ。きっかけになったのは、キャラクターの人気投票をやったときに、ベスト5が全員女のコキャラだったんです。読者はこのマンガに恋愛を求めてなかったんですよ。それで、恋愛を盛り上げるよりは、女のこたちの生き様を描く路線に

なっていました。²⁹

ここでは、具体名こそ出ていないものの、先に検討した通り、当初の恋愛対象として乙幡が想定されていたこと、「恋愛」という主題が意図的に希薄化されていったこと、そしてそれが読者からの人気投票を契機としていたことが明らかされている。

当該のキャラクター人気投票（『りぼん』2001年11月）を見れば、富重の証言する通り、ここではコギャルとして造形されたキャラクターが一位から五位を独占しており、主人公の蘭が一位に、親友の美由と綾が二位と三位にランキングされている。さらに、四位には蘭の妹である寿沙夜^{さよ}が、五位には蘭のライバルである本田マミが登場し、その後によりやく綾の恋人となる乙幡麗や蘭の恋人である黒井達樹がランキングされている。また、得票数（総計9831票）に目を向ければ、蘭が3863票、美由が2138票、綾が1634票と、上位の三名だけで全体の約八割を、さらに蘭ひとりで全体の約四割を占めており、読者からの人気がいかにコギャルに集中していたのか伺い知ることができる結果となっている³⁰。

しかしながら、この人気投票が実施されたのは、『りぼん』2001年11月号であり、それは2002年5月号に連載を終了した「GALS!」の最後期に位置している。この点を考慮すれば、富重が指摘するように、上記の人気投票が「恋愛」を後景化する直接的な契機として働いたとは考えにくい。むしろ、「主人公の異性愛ロマンス」というモチーフは、先述のように乙幡から達樹へと恋愛対象が移行した段階ですでに半ば失効していたといえるし、それはまた「享樂的なコギャル」というメディア・イメージを踏襲しながら、セクシュアリティを捨象していった「GALS!」の内的論理からすれば、当然の帰結であったともいえる。なぜなら、性的な身体を抑圧しながら「少女」との差異化を図ろうとすれば、必然的に異性との「恋愛」は——それが「乙女ちっく」なロマンスであろうと、エロティックな性愛を含むものでであろうと——周縁へと排除するほかないからである。そして、この点を踏まえれば、乙幡から達樹へと恋愛対象が移行していったのは「GALS!」において決して偶発的な出来事ではなく、むしろ「性的に純潔なコギャル」という蘭のねじれを孕んだ人物設定を保持するための必然的な措置であったといえる。

ただし、その一方で、富重の証言に加え、先述のように藤井みほなが「GALS!」を執筆するにあたって読者からの要望や反響に積極的に応答して

いったことを思い出せば、人気投票を直接的な契機としなかったとしても、読者人気が物語の路線変更に大きく関与していたこともまた疑いえない。この点を考慮するならば、「GALS!」において「主人公の異性愛ロマンス」という従来の主題は、テキストに内在するコギャル表象の論理と、コギャルに対する読者人気の集中という外在的な要因が相互補完的かつ循環論法的に機能することで、後景に退くことを余儀なくされたのである。

そして、こうした「恋愛」を脱中心化しようとする表象の力学は、逆説的にも『りぼん』というメディアの特性と切り離すことができないものである。なぜなら、コギャルから過度なセクシュアリティが排除されていたのは、「GALS!」が『りぼん』という小学生向け少女マンガ誌に掲載されていたからであり、また、受容者側の反応が積極的にテキストに編入されていたのも、作者／雑誌と読者の双方向的なコミュニケーションを重視する『りぼん』の特性に多くを負っているからである。いうなれば、「GALS!」は、『りぼん』というメディアの条件に忠実であるがゆえに、それを枠づける異性愛イデオロギーが後退するという、逆説と屈曲を孕んだ重層的なテキストとなっているのであり、その変転を決定づけたのが先の人気投票であったのである。

5 おわりに

冒頭においても触れたとおり、1990年代は、高度消費社会体制の進展に従って、文化的嗜好の細分化が若年層においてそれまで以上に進行し、若年女性をめぐって多様な文化的・社会的言説やイメージが競合・交差・抗争していった時代である。またそれとともに、この時代には、若者向けの都市文化・消費文化の発展や郊外化の進展によって、家族・地域・学校など既存の共同体が弱体化する一方、若者を吸引する場として都市の「第四空間」がその位置価値を高めていった³¹。とりわけ、80年代に最先端の消費空間として演出されていた渋谷は、90年代の半ばには多数のコギャルが流入するストリートカルチャーの中心地へと変貌し、彼女らの奇矯な振る舞いやファッションはメディアによってさかんに喧伝されていった。

こうして、コギャルがメディアの寵児として特権的な立場を確保していくなか、世紀転換期に連載された「GALS!」は、「消費社会における享乐的で自己肯定的な若年女性」というコギャル・イメージを全面的に導入した点で、『りぼん』史のなかで画期をなしていた。テキストは、享乐的なコギャルの日

常を喜劇的にデフォルメしながらも、その文化的意匠を巧みに表象空間に散りばめることで、低年齢層に対するコギャル文化のマニュアルとして機能していった。

しかし、その一方でブルセラや援助交際など性的スキャンダルの主体であったコギャルは、当時の社会において問題化された存在でもあり、「GALS!」は物語内容の水準においても、描画の水準においても、問題の焦点となった過剰なセクシュアリティを不可視化していった。それゆえ、「GALS!」においてコギャルは、内向性・受動性・被傷性などを特徴とする従来の「少女」像との断絶を見せる一方、セクシュアリティに関しては、「少女」のそれと変わることがなかった。

ただし、そのうえで注目すべきは、「GALS!」において「男性からの承認を通じた肯定的な自己像の確立」という『りぼん』に顕著なアイデンティティ構築の作法が退けられていった点である³²。先述の通り、『りぼん』は乙女チックマンガ以降、等身大の少女を主人公とし、少女趣味に彩られた異性愛ロマンスを雑誌の主軸に据えていった。陸奥A子、田淵由美子、太刀掛秀子ら乙女チックマンガの中心的なマンガ家はもとより、80年代以降に活躍する『りぼん』作家の多くも、様々な物語的的技巧を凝らしながら、平凡な少女が理想的な男性に恋をし、その承認や庇護を通して安定的なアイデンティティを獲得するというモチーフを繰り返し変奏していった。それは少女読者の作中人物への熱狂的な同一化を可能にするとともに、既存の支配的なジェンダー規範を反復／強化するものでもあった。

それに対して、「GALS!」は、コギャルに関するメディア・イメージを利用することで、自己の欲動に忠実な行為主体として蘭を措定する一方、その恋人である達樹に内発的な動機を与えず、彼女の援助者に据え置くことで、男性＝行為主体／女性＝援助者という、支配的なジェンダー・ロールを反転させていった。それに加え、テキストは、「主人公の異性愛ロマンス」という形式を採用しつつ、その内実を空無化することで、男性からの庇護や承認を通じて少女が居場所を発見／回復するという、『りぼん』を枠づける家父長的な物語論理を後景へと退けていったのである。

一方、その代補として「GALS!」のなかで前景化されていったのは、コギャル同士の絆である。先述のように、「GALS!」では、主人公の蘭を筆頭にその親友である実由・綾という三人のコギャルが主要人物に据えられ、日常の出来事や悩みを通して彼女らがその絆を強めていくさまが強調されている。こう

したコギャル同士のホモソーシャルな絆は、達樹とのロマンス以降も変わることはなく、むしろ読者からの人気を後押しにしながら、それまで以上に前景化されていくこととなる。それは物語の終幕近く、学園マンガとしてのクライマックスとなる「卒業」を綴った下記の場面にも顕著に見出すことができる。

卒業式が終了したあと、蘭・美由・綾の三人は、それぞれの恋人である達樹・大和・乙幡、さらには池袋のコギャルであるマミやハルエたちと渋谷で合流を果たす。合流後、綾は自身の高校生活を回顧しながら「この3年間ほんとにいろんなことがあったね」と感傷に浸り、それを聞いた美由もまた「うん 数えきれないくらいの思い出がいっぱい…」と応じる(10巻 p.125)。さらに、ページをめくって、図11の場面において、綾は「でもどれもこれも無駄なことはひとつもなかった みんなに会えて…私ほんとによかった」と、高校生活を回顧しながら、遊興をともにしてきた仲間たちに感謝の意を述べようとする。



図11 藤井みほな『GALS!』10巻, 集英社,
2002年, pp.126-127

ただし、綾の視点ショットとして提示された下部のコマでは、綾の言葉に反応する綾と蘭がクローズアップで写し出される一方、それ以外の友人たちは画面から消失してしまっている。その下のコマでも、「なんたってうちらは一生モンのCHO→FRIENDSだもんよ! これからも うちらの絆の太さは変わんねー だろっ?」という蘭の言葉は明らかに綾と美由の両名にのみ向けられており、それ以外の友人たちは「うちら」という一人称代名詞から暗に除外されている。

こうした三人の「絆」の特権化は、次ページでも同様に見出すことができ、先述の蘭の言葉に各々が応答しながら食事に出かけるまでの出来事を素描したこのページには、「そう トーゼンうちらは FOREVER FRIENDS FOREVER GAL S!」という蘭のモノログが渋谷の都市風景に重ねあわされている。ここにおいても、「うちら」という言葉が一コマ前から連続していること、さらに二つ目の「FOREVER」が「GALS!」を形容していることを考えれば、蘭のモノログが強調するのは、「コギャル／ギャル」であることを要諦とした三人の結びつきにほかならない。すなわち、図像表現が男性を含めた集団全体の共同性を活写する一方、そこにモンタージュされた蘭のモノログは、あくまでも「コギャル」としての絆の顕揚に向けられているのである。

以上のように、「GALS!」では「コギャル」という問題化された若年女性像を表象する過程で、過度なセクシュアリティの抑圧と異性愛ロマンスの至上化という『りぼん』を大枠において枠づけるジェンダー的規範が葛藤を演じ、その間隙から「女性同士の連帯」が主題として浮上していった³³。こうした主題変更の背景に、テキストの内的論理や雑誌のマーケティング戦略とともに、作者／雑誌と読者の双方向的なコミュニケーションが大きく関与していたことは、先述の通りである。すなわち、「GALS!」は、「コギャル」という異質な若年女性像を媒介とすることで、逆説的にも作者／雑誌と読者の相互交渉的な関係性が活性化すると同時に、それがまたテキストの主題にも影響を与えるという循環的な回路をたどりつつ、テキストの内外において女性同士の紐帯を強化していったのである。

ただし、最後に付言すれば、こうして『りぼん』を媒介として編成された広範な読者共同体は、2000年代に入るとその規模を急速に縮小していくこととなる。出版統計を見れば、最盛期に250万部を誇った『りぼん』は、2004年には100万部を切り、2010年には約30万部にまで落ち込んでいる³⁴。その背景には、『りぼん』作家の世代交代や人気作の終了、ライバル誌『ちゅあ』の台頭、子供向け娯楽の多様化、マンガの相対的な地位の低下、少子化の進展など、多様な文化的・社会的要因が複雑に絡み合っている。

とりわけ、そのなかで見過ごすことができないのは、小中学生向けファッション誌の台頭である。1986年に創刊された『ピチレモン』（学習研究社、現在は学研パブリッシング）を筆頭として、1990年代後半から2000年代初頭には、『nicola』（新潮社、1997年）、『melon』（祥伝社、2001年）、『ラブベリー』（徳間書店、2001年）、『CANDY』（白泉社、2001年）、『Hana*chu→』

(主婦の友社、2003年)など、多数のファッション誌が小中学生向け雑誌市場に参入していった。それはいわば、ファッション誌の浸透と嗜好の細分化というハイティーン層における文化的環境の変容をローティーン層において再現するものであったといえる。

一方、2000年代に入ると、少女マンガ誌の第一位の座は、『りぼん』から『ちゃお』へと推移していく。雑誌付録の充実、アニメ化やグッズ販売の積極的推進、文房具やコスメ、ファッション・グッズも含めたトータルブランド「ちゃおガールスタイル」の設立など、『ちゃお』は、マンガという虚構空間と少女読者の生活空間を接続する様々なマーケティング戦略によって、2000年代の少女マンガ誌を牽引していくようになる。また、2000年代以降、「コギャル」と連続性を持つ「ギャル」が若年女性のあいだで広範に波及していくなか、『ちゃお』では「ギャル」を主人公に据えた和央明「姫ギャル♥パラダイス」が、2009年より連載を開始する。それでは、「GALS!」からおよそ10年がたち、少女向け総合メディアの橋頭保と化していった『ちゃお』において、「ギャル」という新たな若年女性像と節合しながら、いかにして従来の「少女」像は変容/再構築されていったのか、この点については稿を改めて論じたい。

注

- 1 本論文は、平成25-27年度科学研究費助成基金（若手研究B「1980年代から2000年代の少女マンガにおける若年女性表象の表象文化論的研究」研究代表者：杉本章吾、課題番号：25770057）の助成を受けた研究成果の一部である。
- 2 代表的な例としては、上間陽子「現代女子高校生のアイデンティティ形成」（『教育學研究』69巻3号、日本教育学会、2002年）、佐藤（佐久間）りか「『ギャル系』が意味するもの——<女子高生>をめぐるメディア環境と思春期女子のセルフイメージについて」（『国立女性教育会館研究紀要』6号、国立女性教育会館、2002年）、難波功士『族の系譜学——ユース・サブカルチャーズの戦後史』（青弓社、2007年）、松谷創一郎『ギャルと不思議ちゃん論——女の子たちの三〇年戦争』（原書房、2012年）などを挙げることができる。
- 3 こうした小学生層における少女マンガ誌の突出した人気は、出版統計を参考すればより明らかである。先述の通り、高校生を中心としたハイティーン層において少女マンガ誌が出版規模を縮小する一方、ファッション誌・情報誌は一定のポピュラリティを獲得していった。ただし、その内実を見れば、主流派の『セブンティーン』や『プチセブン』、個性派女性の愛読誌である『CUTiE』、コギャル雑誌の代名詞となる『egg』など、個々の代表誌を見ても、200万部はおろか100万部に届くものすらなく、大半は50万部前後にとどまっている。（メディア・リサーチ・センター編『雑誌新聞総かたろぐ』[メディア・リサーチ・センター、1990年-2000年]参照）。さらに、毎日新聞社の実施する『読書世論調

査』において、90年代を通して小学生層の「ふだんよく読む雑誌」の上位に『りぼん』・『なかよし』が常にランキングされていることを考えても、小学生層において文化的嗜好の細分化はさほど顕著ではなく、少女マンガ誌が共通の文化経験の基盤となっていたことは明らかであるといえる（毎日新聞社編『読書世論調査』〔毎日新聞社、1990年—2000年〕参照）。

- 4 代表的な著作としては、大塚英志『たそがれ時に見つけたもの——『りぼん』のふろくとその時代』（太田出版、1993年）、橋本治『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ』（下巻、河出書房新社〔河出文庫〕、1984年）、藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？——少女マンガが映す心のかたち』（学陽書房、1998年）、宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の30年とコミュニケーションの現在』（PARCO出版、1993年）、ヨコタ村上孝之『マンガは欲望する』（筑摩書房、2006年）、米沢嘉博『戦後少女マンガ史』（信評社、1980年）などが挙げられる。
- 5 そのなかでも、個々の作家論ではなく、1990年代の『りぼん』の雑誌戦略や読者受容を論じたものとして、倉持佳代子「少女マンガを支えた読者共同体のゆくえ——1990年代の『りぼん』から」（ジャクリース・ベルント、山中千恵、任蕙貞編『国際マンガ研究3 日韓漫画研究』京都精華大学国際マンガ研究センター、2013年）を挙げることができる。本論文集は、インターネットにおいて閲覧可能である（<http://imrc.jp/lecture/2011/10/3.html> [2014年5月30日閲覧]）。
- 6 『財界人』財界人出版、1998年2月、pp.34—41。
- 7 『SPA!』扶桑社、1997年6月25日、pp.44—53。
- 8 「GALS!」以前にコギャルが主要人物として登場する『りぼん』作品として、矢沢あい「ご近所物語」を挙げることができる。ただし、「コギャル」と対立的な「不思議ちゃん」を主人公とするこの作品において、コギャルは主要人物の一人に据えられながら、集団のなかで周到に排除されてもいる。この点については、拙論文「矢沢あい「ご近所物語」における若年女性のセグメント化と「少女」の再構築」（『文藝言語研究 文藝篇』65巻、筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻、2013年3月）を参照のこと。
- 9 権名あゆみ『ベイビィ★LOVE』集英社（集英社文庫）、4巻、2007年、p.117。
- 10 権名あゆみ『ベイビィ★LOVE』4巻、p.122。
- 11 権名あゆみ『ベイビィ★LOVE』4巻、p.123。
- 12 権名あゆみ『ベイビィ★LOVE』4巻、p.267。
- 13 本論文中の「GALS!」からの引用は、りぼんマスコットコミックス版『GALS!』（1—10巻、集英社、1999—2002年）に基づいている。
- 14 むろん、それは全盛期を支えた『りぼん』作家が90年代後半に活躍していなかったことを意味するものでない。むしろ、バレエ・マンガを90年代に復興させた水沢めぐみ「トウ・シューズ」、双子の妹の恋愛を阻止するため、全寮制の中学に女子と偽って編入した少年を主人公に据えた吉住渉「ミントな僕ら」、幻想的なムードのもと、死者と恋に落ちた少女の失意と救済を描いた矢沢あい「下弦の月」など、90年代後半には人気作家の手による意欲的な作品が『りぼん』の誌面を飾っていた。しかし、その半面、読者人気という観点からすれば、これらの作品の多くが全盛期に連載された各自の代表作ほどの訴求力を持ちえな

- かったこともまた否定できない。また、当時の『りぼん』による新人作家の発掘例としては、1996年にデビューした種村有菜を挙げることができる。フラットで流麗な描線によるアニメ的な絵を得意とし、「セーラームーン」以降の戦闘美少女の系譜に連なる「神風怪盗ジャンヌ」によって大きな成功を取めた種村は、「時空異邦人KYOKO」,「満月をさがして」,「紳士同盟†」など、ヒット作を立て続けに発表し、2000年代の『りぼん』を代表する看板作家としての地位を確立していった。
- 15 物語の文脈と必ずしも一致しない、ポーズを取ったキャラクターの全身像を指す用語。1950年代後半に、高橋真琴を嚆矢として少女マンガに定着した表現技法であり、その成立過程に関しては、藤本由香里「少女マンガの源流としての高橋真琴」(『マンガ研究』vol.11, 日本マンガ学会, 2007年)に詳しい。
 - 16 講座の具体名を挙げれば、「ネイルアート講座」(3巻),「mihonaのウィッグ講座」(4巻),「なりきりGALS!講座」(5巻),「フレッシュャーズGAL講座」(6巻)などである。それぞれの講座では、ネイルやウィッグ、コスメなどに関する実践的な知識が、図解を交えながら解説されていた。
 - 17 また、「GALS!」では、アニメやゲーム、オモチャとのメディアミックス戦略が敢行され、資本の論理を媒介としながら、コギャル的な文化意匠が少女向けに商品化されていった。一例として、玩具会社TOMYの発売した関連グッズのいくつかを挙げれば、ヒョウ柄やハイビスカス模様をあしらったプリペイド式の携帯電話、同様の模様をあしらったインスタントカメラ、「ギャルズ カラーエクステ」,「ギャルズ ネイルアート」,「ギャルズ アクセサリーーズ」と命名されたファッション・アイテムの数々など、アニメ放映と連動して多数の実用性の高い少女向け玩具が発売されていた。
 - 18 「テレクラ」(テレホンクラブ)を通じて知り合った男性を集団で脅迫／暴行し、金銭を奪いとる犯罪行為を指す言葉。「テレクラ狩り」の略称。
 - 19 『りぼん』集英社, 2001年11月, p.139.
 - 20 ササキバラ・ゴウ『〈美少女〉の現代史——「萌え」とキャラクター——』講談社(講談社現代新書), 2004年, 第三章「変貌していく美少女」参照。
 - 21 ササキバラ・ゴウ『〈美少女〉の現代史』p.161.
 - 22 藤井みほな『スパイシー★ガール』集英社, 1994年, p.142.
 - 23 倉持佳代子「少女マンガを支えた読者共同体のゆくえ」p.96.
 - 24 倉持佳代子「少女マンガを支えた読者共同体のゆくえ」p.97.
 - 25 正確には、乙幡は「GALS!」と題するコギャル誌の主催する「スーパー高校生グランプリ」で一位を獲得した高校生として設定されており、「スーパー高校生」自体は、乙幡以外にも複数存在している。
 - 26 ちなみに、達樹が初めて『りぼん』に登場するのは、『りぼん』2000年1月号である。
 - 27 『りぼん』集英社, 2000年9月, p.109.
 - 28 『りぼん』集英社, 2001年1月, p.69.
 - 29 「少女マンガの現場 90年代の『りぼん』編集部——集英社 富重実也さんの場合——」『ROLa』新潮社, 2013年11月, p.23.
 - 30 参考までに90年代半ばに『りぼん』に連載された矢沢あい「ご近所物語」のキャラクター人気投票(『りぼん』1997年4月号)を見れば、2位にヒロインの恋

人である山口ツトムがランクインしているのを筆頭に、4位に田代勇介、5位に陶波法司、8位に如月星次、10位に武志など、トップ10の半数を男性キャラクターが占めている。この結果からも、「GALS!」において読者からの人気がいかに女性キャラクターに集中していたのか、伺い知ることができる。

- 31 宮台真司『まぼろしの郊外——成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日新聞社(朝日文庫)、2000年、pp.142 - 144.
- 32 記述に正確を期せば、「GALS!」ではコギャルとして造形された作中人物のすべてが「恋愛」的事象から距離を置いているわけではない。むしろ、乙幡に恋慕する綾や、蘭の兄と家庭を持つことを夢見る美由など、蘭を取り巻く他のコギャルたちから透けて見えるのは、「恋愛」的事象を通じた「乙女チック」な心性にほかならない。すなわち、彼女らは外見においてコギャルとしてのイメージを喚起する一方、その内面においては従来の「少女」として造形されているのである。それゆえ、「GALS!」では「恋愛」に傾斜する他の作中人物との対比において、蘭の「コギャル」性がより一層強調されているといえる。さらに、こうした対照性を強化するように、蘭は美由たちの「乙女チック」な言動や振る舞いを幾度となく揶揄し、「恋愛」に没入する彼女らと自身との差異を強調している。いわば、「GALS!」は、主人公の蘭の周囲に「乙女チック」なコギャルを配置することで、蘭の単独性を保証するとともに、副次的モチーフとして異性愛ロマンスを確保することで、従来の読者の期待にも応えるという、「恋愛」に対する二重の振る舞いによって、幅広い支持を獲得していったのである。
- 33 むろん、女性同士の友情というモチーフ自体は、少女誌である『りぼん』において決して珍しいものではない。90年代にも、たとえば、権名あゆみ「あなたにスキャンダル」、矢沢あい「天使なんかじゃない」「ご近所物語」、水沢めぐみ「姫ちゃんのリボン」など、女性同士の友情が物語のなかで重要な役割を果たす作品が多数見受けられる。ただし、その多くが異性愛ロマンスを物語の中軸に据えている点に変わりはなく、最終的に女性主人公を救済するのは意中の男性からの庇護や承認であり、女性同士の連帯はあくまでそれを補完する副次的なモチーフにとどまっていた。

また、藤井みほなの作品史を振り返れば、「女性同士の絆」というモチーフは、1998年に連載された「秘密の花園」にすでに色濃く胚胎している。主人公の榎山美園と「男装の美少女」である花堂朔耶との恋愛を主軸に据え、最終的に二人の「結婚」によって幕を閉じるこの作品は、同性愛的な意匠を散りばめながら、女性同士の絆をより如実に前景化していた。ただし、読者人気という観点からすれば、全6話(単行本に換算すれば1巻)で連載を終了したこの作品が、『りぼん』読者から熱烈に支持されたとはいいいがたい。藤井自身も、この作品が「20代後半から30代の大人の方々に支持」されたことに驚きを見せながら、「でも『りぼん』の漫画家としては失格(笑)」と自嘲気味に述べているが、この「『りぼん』の漫画家としては失格(笑)」という作者の言葉を参照すれば、少女マンガの古典的な物語意匠をふんだんに取り入れたこの作品は、小学生層の関心からいささか乖離するものであったといえる。(藤井みほな『秘密の花園』集英社、1999年、p.161)。そして、この点を踏まえれば、「GALS!」は、「秘密の花園」から「女性同士の絆」というモチーフを引き受けながら、そこにコギャルという最新の若年女性文化の潮流を導入し、読者との相互交渉的な関係性を重視す

ることで、本来の受容者である小学生層に明確に照準したテキストであったといえる。

- 34 メディア・リサーチ・センター編『雑誌新聞総かたろぐ』（メディア・リサーチ・センター，1990年－2010年）を参照。